

〈校内研テーマ〉 互いに学び合う授業の創造

～ 聴き合い・かかわり合い・支え合う授業づくりを通して ～

誤字、脱字を発見された場合は当局までお知らせください

4年 道徳科 《主事招聘授業》

授業者：NT 先生

主題名「相手を思いやって親切に」

内容項目B：[親切・思いやり]

教材名：「心と心のあく手」

出典「私たちの道徳3・4年」（文部科学省）



[2枚の写真]

教職経験5年経年研「道徳科主事招聘授業」。3人の5年経年研の教諭がいる、1名は指導主事を招聘しての校内研として実施されることになっている。NT先生が手を挙げた。「わたしでよければ…」謙虚に授業づくりに向き合い校内研テーマと「考え議論する道徳科の授業」にこだわる。本番当日までに志願のプレ授業が3年生と6年生で2回試行された。一人の授業づくりに皆が協力的に関わり同僚からのアドバイスをいただき本番に備えた。上の2枚の写真、6年生でのプレ授業と、校長室で淡々と自分のプレ授業のビデオで研究を深める授業者である。3回目の本番までに明確に変わったのが授業者の言葉の量であった。

〈K：教師 児童の名前は仮名〉



[村内の交流校内研修として]

国頭村教育委員会は、中学校1校、小学校へき地3校を含めた5校で交流校内研修を企画している。国頭村では中学校が1校なので、全ての子どもが中学校で一緒に学ぶことになる。そのことを踏まえ、小学校から同じ授業形態で学び、子ども達が中学校で戸惑わないように考慮した施策である。

本日の4年生の授業にも、近隣小学校と中学校から5名の参観者が授業からの学びを共にした。

「一人でも多くの教師に学びの機会を…」授業提供者に感謝である。



[授業導入] 1つ目の発問

K：「親切って何ですか？」→ペアへ子ども達は何の躊躇もなくペアで向き合い「聴き合う」

K：ちょっと聴かせて（指名する）

そら：ゆずってあげる

さくら：優しくしてあげる

みあ：気にしてあげる

しろう：相手のことを考えてあげる

シンプルな発問である。余計な説明もなし、「何について話せばいい」が明確である。UD授業の3つの視点にシンプル・ビジュアル・シェアがある。授業者は2回のプレ授業からシンプルな発問の良さに何かを感じていたのだろう。授業者の言葉は少ないが子ども同士の対話は加速する。

[授業導入] 2つ目の発問

K：重い荷物を辛そうに持っているおばあさんがいます。あなたならどうしますか？ → ペアへ



授業者は、資料を読む前に1枚の挿絵を提示し容赦なく『投影的発問』を子ども達に下した。いきなりの感じではあるが、子ども達は何の違和感もなく最初の発問よりも聴き合っている「～のとき、自分だったらどうするか？」子ども達が自分事として考えなければならない。考えようによっては楽だが、その理由を伝える言葉に汗をかくことになる。

子ども：声をかける。持ってあげる。めんどくさい。スルーするかも。

子ども達は無意識のうちに本日のテーマである「親切」について語っていた。

授業者は、ペアによる対話の後に指名し、「どうだった。お話聞かせて。聞かせてもらっていい」などの柔らかな言葉で子どもの発言をうながしていく。

『考え議論する』を考える。ここまで授業者は2回発問を下したが、「まずは自分で考えて」などの発言はなかった。「考え議論する」を自分の考えをもって議論に参加するという順序的な言葉として捉えられていると、単なる個人の考えの発表に陥り議論の深まりに向いていかないことが多々ある。子どもは他者の考えを聴き、自分の考えを提供し、他者の多面的な見方や多角的な考え方という新たな知識や価値を対話から獲得していくもの考える。つまり議論は発表ではなく「対話」による深まりが要であると考え。

[聴き合う関係をつくる]



「学び合う授業づくりで、一番最初にすることは何ですか。」私が授業改革に取り組む学校を訪問するときよく聴かれる質問である。私も躊躇なく即答する、「授業や学級経営で先生と子どもたちの間に『聴き合う関係』をつくることからです。」つづけて「聴き合う関係づくりで最も重要なのが子ども達が先生の話聴く姿勢ではなく教師が子どもの声を聴いてあげる姿勢と、仲間の声を聴いてあげることである。」と答える。教師によっては子どものつぶやきや声に心を向けず、子ども達の「先生の話の聴く姿勢」を話し聴き方のバロメータとする者もいるが、それは間違いであるとあえて断言しておきたい。子どもの声を聴けない教師に子どもは絶対に心を開かない、ただ叱られないように押しだまってお利口さんになっているだけである。主体的・対話的学びが成立している状況ってどんな風景なんだろう。4枚の写真、仲間の発言時に向けられる仲間と教師の視線。仲間の発言をみんなが支えている風景である。さらに教師の居方（ポジショニング）にも低い姿勢とさりげない掌の支えが授業者の柔らかさを感じさせる。『聴き合う関係』が構築された教室で一番の恩恵を受けるのは子ども達である。安心して自分の考えや意見が言える教室では、授業者と子ども達の呼吸が穏やかさや和やかさを生み出し参観者の心を温める。



[主発問（ジャンプ課題）] : 「声をかけずに、だまってついていった僕」は、本当に親切なの？」

授業者は主発問（『批判的な発問』）を子ども達にお下した。「声もかけてないのに親切なの?」、「見届けただけでも親切になるの?」。授業者の発問が子ども達の脳に汗をかかせる。



授業終末、タイトルの『心と心のあく手』ってどういうこと？」

女の子：はやとくんは、心からおばあさんのことを見とどけたから。

男の子：無事にたどり着いてうれしい気持ちになった。おばあちゃんも喜んだ。だから心と心が・・・。

授業者は最後にワークシートを配布し、本日の授業の振り返りを各々に書かせた。

子ども達はここで初めて鉛筆を手にした。

さて、本日の内容項目「親切・思いやり」について子ども達は「考え議論」できたかどうか授業者の振り返りになる。右の写真、自分の振り返りを仲間と交換し合って互いの感想を話す。この最後の対話のパフォーマンスとワークシートの振り返りを評価のバロメータにしたい。



[研究協議会より]

国頭村内の小中学校の校内研修における協議会は、「卓越性探求型アプローチ」(秋田喜代美)のスタイルである。授業参観者が小グループで本日の授業からの学びを共有する。右はグループ協議の間授業者が主事より直接アドバイスをいただく。どちらも笑顔で語られる。



《大城直美指導主事より》

◇安心できる学級経営ができているので、落ち着いた雰囲気授業を進めることができてい。

◇交流の時間がしっかりとれていて、小さな声でも自然に聴こうとする態度ができてい。

◇本時では、「気づかれない親切は、親切と言えるのか」というゆさぶりの発問で試行を深めていた。

TN先生お疲れさまでした。2回のプレ授業と当日までのプロセスがあなた自身を一番成長させてくれたことと思います。「ふんわり・やんわり・しっとり」ほんとに素敵な授業でした。 (国頭学びの会ゆい)